

121228 セイタカアワダチソウ

林道沿いの日当たりの良い場所で、濃い黄色の小さな花をたくさん咲かせていた「セイタカアワダチソウ」も、冬になって花びらを落としてしまいました。

この花は北米原産で、明治時代の末頃に切り花用の観賞植物として持ち込まれた、帰化植物です。

同じ属の「アキノキリンソウ」(在来種)の別名である「アワダチソウ」に比べて、草丈が高いことが名前の由来です。

種子だけでなく地下茎でも増えるのですが、「アレロパシー」を有しており、根から周囲の植物の生長だけでなく、自身の成長をも抑制する化学物質を出すようです。

昭和40年代以降、特に関東以西から九州にかけて「大繁殖」し、日本生態学会によって「日本の侵略的外来種ワースト100」にも選ばれています。

(時代が平成になる頃から、この花の勢いは衰えてきているようですが…)

一時は花粉症や気管支喘息の元凶だと考えられていましたが、この花は「風媒花」ではなく「虫媒花」ですので花粉の生産量は少なく、花粉そのものも比較的重くて飛びにくい形状であることから、この考えは誤っていたようです。

どうやら「真犯人」は同時期に増えた帰化植物の「ブタクサ」のようですね…

「虫媒花」ということは「蜜源植物」ということであり、花粉を「ミツバチ」などの昆虫に媒介してもらっているのですが、在来の蜜源植物の開花が少なくなる「秋～晩秋」に満開となるため、養蜂家の方々にとってこの花はありがたい存在でしょう。

この季節、日当たりの悪い場所では、林道の路面が凍結しているところもあるのですが、日当たり良好な場所で花期を終えた「セイタカアワダチソウ」をよく観察してみると…

■写真①・②： テントウムシ

◆越冬している個体も、やや暖かな日中には姿を現して、獲物を探しているのでしょうか？ さすがに動きは鈍いようですが。

◆模様は違いますが、いずれも「ナミテントウ」という種だと思います。

■写真③： テントウムシ

◆こちらも「ナミテントウ」ですね。

◆よく見ると、このテントウムシのすぐ右上には、捕食者の影が…

■写真④： ハエトリグモ

◆正面の2個の大きな眼が目立つ小型のクモ、「ハエトリグモ」がいました。

◆その名のとおり、ハエなどの小型の虫を主食にしており、捕獲用の網は張らずに、地道に歩き回りながらハンティングをするクモです。

◆写真の個体は「ネコハエトリ」という種で、早春から晩秋にかけて見かけることが多く、人家にも適応しているようです。(成体で越冬します)

■写真⑤： アブラムシ

- ◆「セイタカアワダチソウ」の茎や葉裏を見ると、4mmほどの赤紫色に見えるアブラムシがいっぱいいました。
- ◆この種の名前は「セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ」、3月下旬頃から12月にかけて見ることのできる種で、北米原産、20年ほど前に帰化したと言われています。いずれにせよ、とても長い名前ですね…
- ◆この「アブラムシ」を捕食しようと「テントウムシ」が飛来する、その「テントウムシ」を捕食しようと「クモ」がやってくる、という「食物連鎖」が見えてくるようですね。

さて、昔、子どもたちの間では「ハエトリグモ」に喧嘩をさせる「ほんち」という遊びがあり、今回紹介しました「ネコハエトリ」の雄同士を戦わせたようです。

そのため、「ネコハエトリ」には「ホンチ」という別名もあったのです。

そして「ホンチ」の持ち運びケース兼試合リングとなるマッチ箱のような「ほんち箱」という小箱も売られていたところがあるそうです。

でもこの遊び、今の子どもたちには流行りそうにありませんね。

もう一つ、今風の遊び？を紹介しましょう。

PCモニター画面上にいる「ハエトリグモ」のまわりでマウスポインタを動かすと…

それを餌と認識した「ハエトリグモ」が**捕獲体勢**に入ります！

でも…

目の前のPCモニター上にクモがいたら、たいていの子どもたち、それどころか大人でも逃げ出してしまうかも知れませんね…









